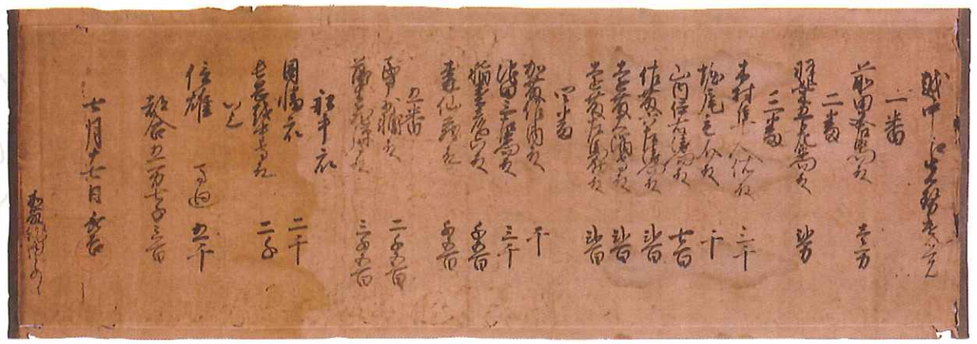
羽柴（豊臣）秀吉朱印状「越中江先勢遣覚」

［天正13年（1585）］7月17日
加藤作内（光泰）宛
阿部家史料

Ⅱ期



（29.9×92.9cm）

本能寺の変後、秀吉による天下統一に向けての動きが活発化し、各地で戦闘が繰り広げられました。その幾多の合戦の際に効率的な戦力の配置や軍役人数などが考えられ、作成されたのが「陣立書」です。

秀吉は、天正12年（1584）小牧長久手の戦いで、織田信雄（信長次男）を臣従させ、信長の後継者としての地位を確立し、勢力圏の拡大を図っていきます。その全国平定過程で、翌13年7月の関白就任後、8月に信雄に味方し敵対していた越中（富山）の佐々成政攻めにとりかかります。

本史料は、この越中攻めに動員された、美濃大垣城主加藤作内（光泰）に宛てて出された陣立書で、陸奥国棚倉藩主阿部家に伝来したものです。軍勢は、一番手から五番手で編成され、越中に近い加賀の前田利家を先陣として、越前・若狭・近江・美濃勢が続き、中には山内一豊、池田輝政ら名のある諸将の名前が見られます。その他に陸路からだけでなく、「船手衆」と記される因幡衆（因幡鳥取城主宮部継潤の手の者）や丹後宮津城主細川忠興といった水軍組織も動員されていることが注目されます。最後に記された総大将の織田信雄だけが敬称もなく呼び捨てなのは、この時の彼の立場を暗示するものといえましょう。

この越中攻めは、富山城主の佐々成政を討つ目的のほか、信雄が家臣であることを天下に知らしめ、なかなか臣従しない越後の上杉景勝を勢力下におこうという、秀吉の狙いがあったといわれています。

（学芸員　丸山美季）

是！ポイント

天下統一への足跡を示す陣立。豊臣秀吉が「陣立書」という形式の文書を、また朱印を用いはじめるのは、天正12年（1584）が最初だといわれます。この秀吉の朱印が押された越中攻めの陣立書は、その翌年に発給されたもので、秀吉の天下統一の足跡をたどる上で貴重な史料です。当館では初公開となります。

「解体新書」

Ⅱ期

序図1冊・本文4巻　5巻5冊
安永3年(1774)刊
杉田玄白他訳　中川淳庵校　小田野直武画
板元　江戸・須原屋市兵衛
児玉幸多史料

（25.8×18.5cm）

（兜鉢高20cm　胴高47cm）

「薄紫糸威二枚胴具足」

江戸時代
牧家史料

Ⅱ期

具足とは、当世具足の省略した呼び名で室町時代後期から安土桃山時代に生じた鎧の形式の名称です。「当世」とは「現代」を、「具足」は「全て備わったもの」を意味します。当時（戦国時代）の人々は、伝統的な鎧に比べて「完璧な新しい鎧」ということで「当世具足」と呼びました。集団戦や鉄砲戦といった当時の戦法に適した鎧で、機能性・生産性を重視し、板札や蝶番を用いるなどの工夫が凝らされています。

薄紫糸威二枚胴具足は戦国武将堀尾家、のち徳川譜代の大名石川家に仕え、家老職となった牧家に伝来したもの。兜の鉢は鉄黒漆塗の頭形鉢で、鉄板札七段下りの鞠をつけ、薄紫糸や萌黄糸で威ています。前立は銅鍍金の日輪。胴は左脇に蝶番をいれた二枚胴で、鉄碁石頭切付を革包み黒漆塗として薄紫糸で素懸に威しています。頬当、三枚筒籠手、七本篠脛当が付属しています。

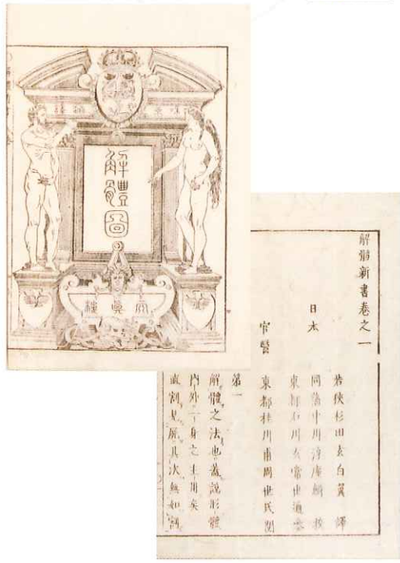
（学芸員　長佐古美奈子）

是！ポイント

具足には漆工、金工、染織などあらゆる工芸の技法が使われています。兜の鞠が薄紫、萌黄、赤と変化しているところが、よく見ると美しいです。

是！ポイント

西洋医学の扉を開いた書物。教科書などで誰もが一度は見たことがある、あの有名な解体新書。ほんものです！ 現在普通に使っている“盲腸”・“神経”・“筋肉”などの言葉は、この時の新造語であることを御存じですか？ また、小田野直武による人体解剖模写図の精密さにご注目ください。



若狭国小浜藩医杉田玄白らによって、安永3年（1774）に刊行された、日本初の西洋解剖学書の本格的な翻訳書。原典は、ドイツの医師クルムスの著書*Anatomische Tabellen*をオランダ語に翻訳した*Ontleedkundige Tafelen*―通称『ターヘル・アナトミア』（1734刊）です。

『解体新書』翻訳の発端となったのは、明和8年（1771）3月4日に杉田玄白・前野良沢らが、江戸小塚原刑場（現東京荒川区）で行われた腑分け（解剖）を見学し、持参した『ターヘル・アナトミア』の図の正確さに衝撃を受け、翻訳を決意したことにはじまります。早くもその翌日から、前野良沢・杉田玄白が中心となって、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周らが翻訳にとりかかり、改稿11回を経る大変な努力の末、3年半におよぶ歳月をかけて完成させました。精密な挿図を描いたのは、秋田蘭画を代表する画家である秋田藩士小田野直武です。本書の翻訳・刊行は、医学史上画期的な出来事として高く評価され、またそれ以降の蘭学の飛躍的な発展のもととなった記念碑的な意義を持っています。

（学芸員　丸山美季）